

アルツハイマー型認知症の行動・記憶障害に対する援助方法の確立

保健医療学部 臨床作業療法学講座 竹田里江, 村上新治

アルツハイマー型認知症の記憶障害や行動障害に対する援助法の確立のために、脳機能画像、神経心理学検査、生活歴聴取による結果から、1) 認知症の程度、2) 脳萎縮のタイプ、3) 生活背景を明らかにし、それぞれの患者に、どのような援助方法が有効なのかを系統的に明らかにすることを目的とする。これによって、個々人の高次脳機能障害や生活背景に基づいた系統的治療の確立を目指す。

アルツハイマー型認知症によって、目的の行動ができない、記憶障害が顕著である場合、どのように再獲得を援助するか？

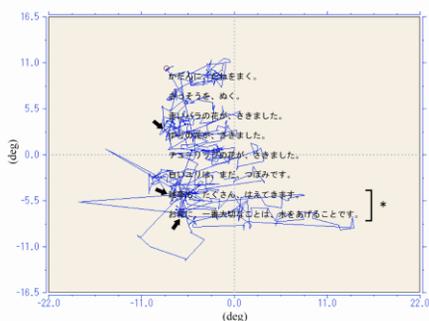
内的方略

1) 視覚的イメージ法や内的言語
反復による方法

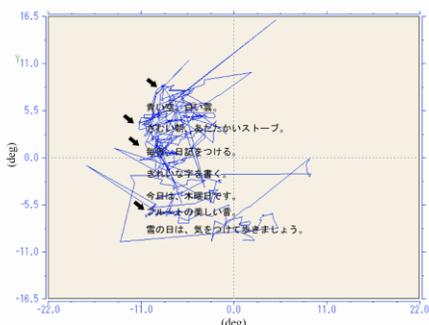
2) 情動の利用

興味を示す内容や物、言葉を用いて訓練することで、記憶の持続や統制のとれた眼球運動に繋がる場合がある

A A氏が好む文章



B A氏が興味を示さない文章



頭頂・後頭領域に著しい血流低下を示すアルツハイマー型認知症患者の文章音読時の眼球運動時の視線軌跡

A. A氏が好む文章。B. A氏が興味を示さない文章。
いずれの場合も特に文頭や文末でのスムーズなサッケードが困難で、組織化されない眼球運動を多く認めた(矢印)。しかし、A氏が好む文章では(A)、A氏が興味を示さない文章(B)よりも、文章に沿った比較的統制のとれたサッケードを多く認めた。(竹田ら、老年精神医学雑誌、2006)

外的方略

道具の利用
(アラーム、メモ、カレンダー、日記など)

その他

患者の日常生活に必要な動作を繰り返し練習する
「領域特異的訓練」

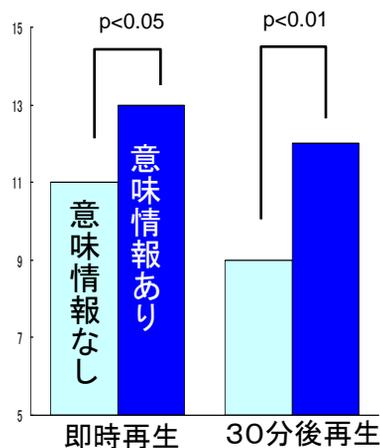


↑例：地下鉄改札の通過練習

3) 意味記憶の利用

一度言っただけでは記憶に残らないことも、意味情報を提示し「内容の理解、納得」という流れを踏むことで、記憶の片隅に残りやすくなり、行動や言動の手がかりやきっかけになりえることがある。

<15個の単語の想起数>



【目標】

同じアルツハイマー型認知症でも、認知症のどの段階で、どのようなタイプの脳萎縮がある場合に、また、どのような生活背景を持つ患者に、これらの方略が有効なのかを系統的に明らかにしていきたい。

